

## 26. てんかん重積状態の機能予後不良例の検討

鳥取県立中央病院神経内科<sup>1</sup>，鳥取県立中央病院リハビリテーション室<sup>2</sup>

○中安 なかやす 弘幸<sup>1,2</sup>，浅井 ひろゆき 泰雅<sup>1</sup>，今村 恵子<sup>2</sup>

### 【はじめに】

てんかん重積状態は早期に発見され、けいれんの重積を早期に止めるところが出来れば、後遺症を残さず、退院できることが多い。一方症例によってはけいれん発作停止後もADL障害を生じ、リハビリテーションを施行しても、十分な改善を認めないこともある。今回われわれは当院に入院となった、てんかん重積患者の中での予後不良例について検討した。

### 【対象と方法】

2006年4月から2010年3月まで鳥取県立中央病院神経内科に入院した、てんかん重積状態患者26症例を対象とした。各患者のけいれん持続時間、入院時および経過中のMRI所見、入院期間、発作前ならびに退院時のADLについて後ろ向きに調査した。

### 【結果】

26症例の退院時mRSは0:5症例，1:1症例，3:3症例，4:5症例，5:11症例，6:1症例であった。てんかん重積発症前がmRS 3以下の18症例に限定すると、てんかん重積発症前後で、mRSが変化しなかった7例（以下A群とする）と同じく1以上悪化した11例（以下B群とする）に分かれた。A群ではけいれん重積状態抑制後の早期に撮像されたMRI拡散強調画像で信号変化を認めた症例が0/7例であったのに対して、B群では8/11例であった。

### 【考察】

てんかん重積状態の機能予後は患者の年齢、重積状態の持続時間、基礎疾患、リハビリテーションの程度などによって影響されることが予想されたが、予後不良例では発症早期に撮像されたMRI拡散強調画像での信号変化を認める例が多かった。Huangら（2009）はMRIで信号変化を認めたてんかん重積状態の15例を報告し、MRI上の信号変化は可逆的な場合と非可逆的な場合があり、非可逆的なMRI変化をきたした場合は予後が不良であったと報告している。彼らの報告を見ると可逆的な信号変化であっても症状が持続している場合も見受けられ、発症早期のMRI撮像はけいれんの原因検索とともに、予後を予測する上で有用な情報をもたらす可能性が示唆された。

### 【文献】

Huang YC, Weng HH, Tsai YT, Huang YC, Hsiao MC, Wu CY, Lin YH, Hsu HL, Lee JD. Periictal magnetic resonance imaging in status epilepticus. *Epilepsy Res.* 2009 Sep; 86(1):72-81.